文藝春秋 オール讀物
33,10,1

カゼ引きを表面の口實に練習場から遠ざかつた。もしこのとき率直に陸連の幹部かコーチ陣にこのことを話をしたら事態はあるいは違つていたかも知れない。脚の故障はアジア大會までには十分に復調できる程度のものであつたからだ。

話さなかつた裏には陸連の中村清ヘッドコーチや朝隈善郎ジャンプコーチの織田幹雄氏に對する反感という妙なものが存在していたためである。織田氏の指導をうける小掛は微妙な立場におかれていたわけである。

加えて小掛の氣の弱さも手傳つていたといえる。不完全なコンディションでのぞんだアジア大會の最終豫選で小掛はとも角ながら三位に入つた。代表選手には豫選會の一、二位が選ばれたが四百米の赤木と小掛の兩選手はとくに過去の實績が買われて推薦された。メンバーの發表をみて小掛の心にも希望の灯がともつた。だが合宿に入つてからイヤな噂が小掛の耳に入つた。

織田氏がどうしてもというのでお情で拾つてやつたとか……。

あれは氣が弱いからとても國際試合に使えないとか……、折角、張りきつた心もこの噂に再び暗くなつた。調子を整えてなんとかしようとした意欲もどこかへ消しとんでしまつた。

織田氏はメンバーの選考には全然タッチしていないし、その性格からいつてもそういうことをいうはずはなかつた。

それだけに小掛にとつてはこの噂の持つ意味が身にこたえるのだつた。

心理的に敗れた結果は走らざる四百米リレー要員として寂しくスタンドから僚友の活躍を見守ることになつた。

オリンピックといい、アジア大會といい、小掛にはどことなく不運がつきまとつているようである。果して、二年後ローマ・オリンピックで小掛はこの不運をふりきることができるであろうか。

眞相はこうだ！

五つの疑惑

ナイロンザイル

世の眼方はナイロン靴下の出現で大助り、破れをつくろう手間がはぶけて……、こんな時勢に、登山中いのち綱のナイロン・ザイルが切斷、このため一登山者の生命が奪われた。ジャーナリズムは「誰も第三者のみていないことを幸いとして、實際には自分たちがザイルを傷つけていたのをかくして罪をザイルに轉嫁……」と報じた。

山での遭難ということだけで、ある獵奇趣味をそそるのに、登攀中結び合つたいのち綱は〝切つたものか切られたものか？〟というミステリーとロマンティックな山岳のあや織りはいわゆる〝小説以上〟であつた。

昭和三十年一月二日に北アルプスの穂高で起つた一クライマーの死は、朝日新聞の連載小説井上靖氏の〝氷壁〟のモデルとなり、映畫化されて、センセイションを卷き起した。小説では會社員魚津恭太と小坂乙彦の組合せで、場所は冬の穂高東壁という難場。〝次の瞬間、魚津の耳は、小坂の口から出た短い烈しい叫び聲を聞いた。……小坂の體は、何ものかの大きな力に作用されるように岩壁の垂直の面から離れた。そして落下する一個の物體となつて、雪煙の海の中へ落ちて行つた。……（小坂が落ちて行つたとき）ショックを全然感じなかつたことは不思議であつた。〟

實際に起つたナイロン・ザイル事件も問題はここにあつた。いわばいのち綱として、お互に結び合つたザイル（ロープ）が、それをビレー（肩にザイルを回し兩手で持つて支える）しているザイルのパートナーに何の衝撃も與えないで果たして切れるものだろうか。たつた二人だけの世界（實際は後に述べるように三人）に起つたこの事件に對して、第一に死者への疑惑、それ以上に生存者への疑惑、第三には第三者（ザイル・メーカー）への疑惑が小説らしい筆致で盛り上げられ、最後にこの小説は魚津の穂高瀧谷登攀中の死で終つている。しかし實際には三年以上もすぎた今なお、この問題はスッキリとした解決を見出されないままに尾を引いている。

……

「世をときめく合成化學繊維ナイロンは、これを使つた製品の強さを二倍にする」などの殺し文句で賣り出した當時、マナスルでもザイルに使用、その強さ、しなやかさ、輕さ、水を吸つてもふやけないなどの特質が實證されてから、登山界では俄然人氣を呼んだ。一方日本の登山熱も高まるばかり。從つて山での遭難も次第にその數を増す實情にあつた。昭和三十年の一月二日に起つた事件は、ただ登山者の不注意としてのみ見過し難い要素を含んでいた。當の遭難を起した登山クラブは三重縣鈴鹿を中心として組織された岩稜會。この年の冬期登山計畫として十二名が石原一郎リーダーのもとに雪の穂高奥又白にテントを設け、積雪期前穂高東壁のロック・クライミングが目的の一つであつた。このアタック隊として石原國利君（當時中大法學部）若山五朗君（當時三重大學藝部）澤田榮介君（當時三重大農學部）の三人は一月一日早朝又白池近くのテントを出發、東壁に取りついたのは午前八時。嚴冬期、しかも標高二千五百㍍の高度から二百㍍におよんで屹立する東壁を見上げて三人は鬪志を燃やしたことであろう。ここで新しく購入された東京製綱の直徑八㍉のナイロン・ザイルをいのち綱としてトップに石原君―セカンドは若山君―ラストを受け持つて澤田君―の三人が順につぎつぎと結び合つた。

從來の麻製ザイルにない優秀性を持ち、どんなことよりも麻より輕く、抗張力は一〇三〇㌔でさしずめ大人十五人の人が下れるという保證付きであつたため、三人のいのち綱（ザイル）への信頼感は非常なものであつたに違いない。

翌る二日、目的の頂上へは四十㍍餘り、午前七時半、ザイルをしめなおし、鬪志を新たにかき立て、前日通り石原君がトップにたつた。若山、澤田兩君は今しがたまでの寢床を足場にビレーした。

お互いに結び合つたザイルに溫かい血が通い出す。例えトップが墜落し、その衝撃にセカンド、ラストが耐えられなくてもそのザイルを解くことも出來なければ、まして切斷することも許されない。立場が違つても最後まで何らかの手段を講じるのがクライマーに課せられた宿命でもある。

一行が挑んだこの難場は約五㍍の岩溝が縱に走り、その割れ目の上に突き出て岩がのつていた。石原君は愼重にこの割れ目に沿つて手懸りを求め、足がかりを探りながら登り、その岩に手がとどく邊りで腰から下つているザイルを岩にかけた。こうしておけば、例え落ちてもこの岩が支點となつて宙ぶらりんになるからだ。（さしずめ掬み上げられた井戸のつるべを想像してもらえばよい。ザイルの一端を下げ若山君らが確保し、他端は石原君の腰に結ばれ、その中間は突出した岩に掛けられて滑車の役をしている）ここで石原君は力盡きて不成功。疲れた石原君に代つてトッ

プを若山君が受持ち再度挑戰することになつた。

と、この瞬間、若山君は「アッ」という聲を最後に、ビレーする石原君の腿に一たん當つて雪の谷底へと吸い込まれていつた。殘された二人は何んの前ぶれもなく、ザイルに傳わるショックもなく、若山君の姿が視界からかき消されていつたため、しばらくは茫然とした。氣をとりなおしてザイルの切れつ端を手繰り寄せて見たが、「僅か五十センばかり振られ氣味に、滑り落ちただけでナイロン・ザイルはこんなに脆く切斷されるものか？」とザイルへの信頼感をすつかり失つてしまつた。ますます猛威を揮う天候にも抗するすべもなく登高を中止して二人は第二夜を明かした。こうして長い長い一夜を明かして疲勞の極にあるとき二人の耳に聞こえたのは救援隊の叫ぶ「ヤッホー」の聲であつた。

救援隊は凍傷で手足を痛めた二人をかかえるようにしてA澤を又白池のテントにひきあげた。三日ぶりにみる痛々しい僚友、しかも一人抜けて……、テントで安否を氣遣つていた人々は茫然として迎えにかけ出すものもなかつた。（以上ナイロン・ザイル事件＝岩稜會朝日新聞三重縣版＝一九五五年一月十三日付、若山君實兄、石岡繁雄氏談を參照）

……

たつた三人の世界で起つたこの遭難事件は命綱の革新兒ナイロン・ザイルの強弱という點にからんで某新聞は「事故の原因はザイルが傷ついていたのを使用者が知らなかつたか、ザイルが古かつたか、細すぎたのであろう」などと報じて五つの疑惑が事件をとりまいた。

遭難者への疑惑？「確保している人に何の衝撃も與えないで落ちた」という事實から、若山君は墜落の瞬間、他の二人を卷きぞえにしたくないという氣持から自らザイルを切斷、あるいは解いて雪の谷底に姿を消したのではなかつたか。（このようなプロットを映畫化したのが上原謙、島崎雪子主演の〝死の斷崖〟）または登高前から予め死場所を求めていたのではなかつたか。

生存者への疑惑？　若山君が墜落したときその體重に抗し切れず石原、澤田の兩君が共謀あるいは單獨でそのザイルを切斷し、若山君をむざむざ墜落死にいたらしめたものではないか？　という刑事問題。

遺體の捜査隊はあれから毎日のように繰り出されたが、その年の七月三十一日、約半年振りで變り果てた若山君の死體はB澤上部の雪の中から發見された。遺體に結ばれていたザイルはそのまま發掘され、これによると約一・五㍍にわたつてケバ立つた部分＝えぐれた部分と次第に細まつていて鋭利な刃物で切斷したあとは認められなかつた。從つて遭難者や生存者への疑惑はまず解消したとみられる。しかしこの間の疑惑の目は當事者にとつてはいたたまれないものだつたろう。

ザイル操作への疑惑？　クライマーにとつてザイルは神聖なものであると云われる。狹い岩ダナ上での設營準備だけにアイゼン（爪のある靴で、氷雪上の登高の際靴のうえにつける）で尻に敷いた（このようなことは屢々行われる）ザイルを踏みつける危險も考えられるが、切斷箇所の狀態からはその點は認められていない。

ナイロン・ザイルへの疑惑？　ナイロン風呂敷は強い。が一度破れ出すともろい。殘されたザイルをナタでたたき切るとひとたまりもない。死んだ若山君の實兄石岡繁雄氏ら岩稜會はここから出發、幾多の實驗が名大の應援を得て續けられた。遭難直後の一月から六

十六度半の鋭利な角度や、三角ヤスリ、四角ヤスリにザイルを當てて、ザイルを引つ張る試驗、あるいはこのヤスリを往復運動さしてみる實驗も行われた。結論は岩角のような鋭利なエッジには十二ミリの麻ザイルは損傷するだけだつたが、當時使用された八ミリナイロン・ザイルではあつけなく切れ、麻にくらべて二十分の一ぐらいという。

一方メーカー側でも實驗に乘り出した。百萬圓の巨費を投じて高さ十㍍の鐵骨のやぐらを東京製綱蒲郡工場に備え、阪大工學部篠田軍治教授（前日本山岳會關西支部長）指導のもとに昭和三十年四月二十九日行われた。しかしナイロンの强度は麻の數倍という結論で、來合わせていた新聞記者達は一齊にナイロン・ザイルは强いと報道した。岩稜會の結論との食い違いが生じたわけだ。このため見學に來ていたある三重山岳會員が不信の氣持で歸る車中、偶然某レーヨン社員から、その社で行われた實驗データーが示された。それによるとヤスリの往復運動（岩場の岩角に摩擦した場合と大體同じ）ではナイロンは簡單に切斷されるというもので、岩稜會と同一の結論であつた。從つて、岩稜會では公開實驗は岩角が丸味を帶びていて、しかもギザギザした實際の岩場の狀態ではなかつたために結果に相違が生じたという解釋がなされた。

實際岩稜會の遭難をきつかけに東京東雲山溪會の神明五峰東稜、大阪市大の前穗三峰のナイロン・ザイル事件が續發、最近では穗高瀧谷クラック尾根を登攀中神大生が二名死亡するなどで、使用者への大きな警告が投げかけられた。このためメーカー側でも事件以後、店頭にばらまかれたナイロン・ザイルを回收して、この事件が完全に解決されるまでは一般販賣を中止するという手段を講じた。

岩稜會の指摘通りナイロン・ザイルは鋭い岩角には麻より弱いという結論は決定したといえる。

その後、この事件は告訴のかたちへ發展していつた。岩稜會側では「蒲郡工場の公開實驗以前に、鋭利な岩角にはナイロンは麻より弱いということを篠田教授は認めながらも、公衆（報道關係）の前で、反對の結果が出るような實驗を行つた。このため①石原君（ザイルのセカンド）の發表がウソであるような印象を與へ、②一般登山者に第二、三のナイロン・ザイル事件を引き起す危險がある」として篠田教授を相手取り石原君の名で名譽毀損の罪狀でもつて名古屋地檢に告訴した。（三十一年六月二十三日）。

これに對し篠田教授は「鋭い角にはナイロンは麻より弱いことは既に發表したが、使用法に觸れたことはないし、學者としてその必要もない」と反論。

公開實驗を東京からわざわざ參觀にはせつけた一登山家は「實驗用の岩角に丸味をつけてあるのを最初に發見したが、實驗はあくまで學問的な破斷實驗であり、遭難との關連はない。第一遭難のときのザイルではないし、外的な條件も異つているから關連づけるのはおかしい」という意見を出した。この告訴から一年余經た昭和三十二年七月ごろ同地檢では「篠田教授は良心的に實驗したし、また故意に事實を曲げたものとは認められない」として不起訴處分にした。

岩稜會では信夫名大法學部長らとともに改めて社會的指導にある人がこれでは危險であるとする要望書を配布し、納得出來る說明を得るか、陳謝されるまでは民事による（昭和三十一年六月二十四日分は刑事）名譽毀損の告訴を考えているという。

小說の魚津は逝つた。しかし現實のナイロン・ザイルはマッターホルン遭難以上の歲月をかけるかも知れない。